



續羣書一覽
七

加
765
7



門 4加2
號
卷

撰集之部
家集之部
歌子之部
和歌之部

續羣書一覽 午
七

法苑珠林卷一

法苑珠林卷一
法苑珠林卷一
法苑珠林卷一
法苑珠林卷一

午百枚

撰集之部

古今和歌集



此集を初め惣て勅撰集の撰出は已に群書一覽
に記載ある爰に略す其底本と流布本との相違
あるを記し以て讀者の心得とせましと欲する
而已

卷才四秋奇下

た、みね

ひと里のみながむらよりは女郎花わかすむ
宿みうへてみましを

此哥本に題しらす素性法師ありとす

卷十五 高奇五

素性法師

秋の田のいほてふおともかけなくおあを
うしとか人のかるらん

此奇兼藝法師なりとす

卷十八 雑奇下

題しらす

よみ人しらす

尸のくる嶺の形実はずすの升思ひ尽せぬ世
の中りうさ

此奇在藤六輔相集くる升せよめり拾遺也

文明十二曆初種上旬候依仰令書写遂数ヶ度校

(第壹號)

合了

権中納言藤原雅康

一 古今血脈抄

厚

三冊

首端古今和奇集聞書と記す初め題号の字を詳

子し席の注はなし字音及び作者の傳は朱書子

す元末は講演之聞書子して初度は文明三年酉

正月廿八日戌之卯始之四月八日午之午成就了

後度は自六月十二日巳時始之七月廿五日己之

并切成貞應二年七月廿二日為家卿奥書之外子

當流二条家玄淵之義也

延徳四年壬子十月廿六日

法中亮志判

此集三条西殿駿州而在國之中令傳受之書写之者也

永祿十年丁卯初冬日

此抄全部四冊才二之一本紛失云々雖有本行失

書共不審丁不改之可也用捨者為博覽書写早

一古今切紙口傳

写

一冊

此口傳三ヶ之大事三鳥の丁三たりの翁の事あら人の事土台の丁秘奇二十五首の事真名序不用之夏飛鳥井家記と事文明十五多陽月五日未

(第壹説)

廿翁とあり

明應九年八月上旬受宗祇法師口傳以東常縁自

筆書写之可有無他見云々

文龜三年四月十八日而口傳而傳授之時以而自

筆御本書写之

柿本人丸之事 未生之為人也

山辺赤人之事 聖武天皇之作名とす

猿丸大夫之事 弓削道鏡とす

兼文曰此大夫之道鏡とすし同人は丹波國美濃

村に弓削と云処に人也俗姓はあやしの民の子

成せりと載るには一代要記を不見と誤りしし
て道鏡は田原天皇の皇子みして素姓正妻氏の
子みは北あり
たか玉木より 山蔭より 天神市実名の事
袖ひちての奇和奇と浦の奇と夏 喜撰法師
の事 清和天皇御作名一といふ事 ちちり
以上古今事是は通へからず心さしの賦事
人々あへて傳へへからず状如作
永仁五年三月十三日

(第壹號)

右近衛中時藤原為相朝臣 在判
次子應永廿三年三月と天正二年臘月廿八日等
之真書雖有之兼文按子人凡より以下は別
書子ありしを後人名を為相卿子微り合併する
処ある一しと覺へ不審しき説とみあし殊度文
辞疑しく東野州宗祇法師と之年子あし書子
あらず見る人信する事勿れち々
一 古今和奇集傳授切紙 写 一冊
此傳授切紙とは
一三木より 又カタマノ木 カハ十冊 サ

古書保字會

カリ毒

一三鳥ニ子ニ呼子鳥ニ都鳥ノ子ニ稻負

鳥ニ子ニ

此書中子伊勢物語七ヶニ大事を云り七ヶニとは

処謂呼子鳥 都鳥 住吉行幸 云ニホニシリ 芥

川 月ハ夕カヒ 夕ワハトリテ 以上三本三

鳥并伊勢物語七ヶニ大事を秘傳する抄ニして

和哥者流ニハニ不場傳校ニハニ也ニ子ニハニ奥書ニ子ニハニ也

し

右此古今集伊勢物語切紙傳授者從先祖清原宣

(第壹號)

賢環翠軒家傳寵宝也依代ニ水紙或破壊或紛失

故此般令授合及全部子孫與ニ充賢不可為他見

他害者也

元祿十丁丑仲秋日

此切紙傳授者從戶川主膳氏平令恩借書寫ニ畢

是以世間ニ云ニ之ニ場傳授ト也仍之右二書ニ秘藏

之者也予子孫疎略不可思而已

元祿十丁丑仲秋日 清原政國入道 在判

此一帖雖可疑者最夥既稱秘書故漫不如按考而

已得原本者可校訂耳

古書保存會

享保十八癸丑首夏念七日 陳水昌勝 在判

右古今集傳授切紙一卷首柏老人牡丹花可相傳也嘗聞老人屬翰之日封識固密以與於泉州場某氏厚一日夙觀每長雅遊于泉州某氏示諸長雅曰有柏老人此記古今傳未之秘說也予未得其傳則不敢發封今也足下既得其傳故附厚長雅乃拜而讀之其間有異於旧聞者所有未聞者於此抄錄以附本篇歸場傳云予獨得天真独朗之卷及十八通之縮卷藏厚之只以未得此傳為恨頃月肥人陳水昌勝携來而示予遂乞借寫之九月五日薄暮起

(第壹號)

筆至夜半而終切其間魯夫承頗多而今敢不加改訂一仍舊本寫之若一二之顯誤以殊正之至其可疑者則俟得原本而復其真也

元文二丁巳歲九月五日初 澤田重樹謹識

一 古今天真独朗之卷 二冊

卷首子超大極秘古今集と記す此卷又秘傳書子しし傳授切紙より詳細也舉る処

御賀玉之水 妻戸子削り先 坂和名種

以上三ヶ之大夏

百子鳥 呼子鳥 稻原鳥 以上三鳥之夏

古書保存會

券多理之翁の大方 卷頭之大方 忘卷頭軸
 之大方 雜卷頭歌之大方 蟬丸之歌三首之大方
 之日神の御奇之大方 九奇所御奇之大方
 卷軸之歌之大方
 右二卷者東野川常縁傳干種玉庵宗祇宗祇亦西
 三条実隆公尙拍老人等傳之以来置玄旨法中以
 秋卷秘本傳口相義厚而大一習水逸一習相傳之
 經代之秋書秋卷如増而朋亮匡連此集虽本於紀
 貫之自全吾基俊二条家代々相承之委讓血脉統
 譜寔奇道之大本此國之至宝奈加之武最可堪

(第壹號)

欣幸而已

延宝九醉天春三月十八日

長雅舟長雅

判

一古今傳授切紙口訣

写

一冊

此書は世俗之所謂古今集三箇之大方四箇之秘
 之十八通之切紙近代縮一卷書之古今二字之大方
 之古今土台の大方古今眞體之大方古今三才の
 之大方古今假名序発端詞之大方古今假名序和奇
 二字の大方古今四拾利日之大方古今相生の大方
 之古今奈良市川市之大方古今假名序万葉集時代の
 口訣古今卷頭脇貫之奇口訣古今亦三内侍奇之

古書保存會

口訣古今花津見之口訣古今真名序之口訣古今
短哥之大多古今返奇之口訣古今俳諧奇等之口
訣古今阿平武之口訣等也
右十八通之切紙如明扱昔者一通之々其著至
々重時節隆傳之欲可許失縮干一卷蓋以被許之
多此切紙東野州常縁傳干種玉庵宗紙宗紙亦西
三条実隆公肖拍老人等以二度之聞書切紙度々
傳之以来至云旨法師向々相承要自云旨法師明
心居士廣沢長孝至野子而如一著之水邊一器相
傳之寔奇道之大本此圖之至宝厚加之武置不堪

(第壹號)

欣幸而已

延宝九年西二月十八日

風觀舟長雅 花押

一 古今和奇集私記

写 一册

此私記著者詳かふり古今集の序をよく解せ
し書あり古人の説を正却したて自考ハ俄書子
し異説ハ頭書子細注す此抄篇中子冠辞礼多は
其考子委しくいハは爰子略きていわすと記す
名らくは真測之筆ならんか殊子同さましき文
體也記中難波津子さくやこの花は梅子あらず
梅は飛鳥、寔之此始めて唐国より宮しまのら

古今和歌集

人難波律と云ふの比よるし物ならずと載せし
花は梅子ありし下巻に源奇はいまた爰には
けさりし也また真名序の誤れる事を取々あけ
つらひしなり

一 古今和歌集標注 四冊

此書は契沖阿闍梨が真蹟なり後梅子岸本由
流に増注を加へたるものあり後沖阿闍梨し考
へたる本を元となせし善書あり

一 冠注古今和歌集 二冊

本居宣長遺説村田並村神考

(第壹號)

此書は鈴之屋之うし自筆本也並樹へさつけら
れしものつきました口つからつたえられし説
ものせ又並樹に升つからの考もくわえられた
り且本文のかたはらよ真字の傍注あり

一 後撰和歌集 二十卷

卷才四 夏奇

題しらず よみ人あらず

足川の山ほととぎすおはへて誰かまけると
音さの替みなく

此奇古今集にも入たり

卷七 秋 奇 下

よ 4人 ねらす

初 しくれふれは山へもおもほゆるいつれの
かたかまつむみつらん

此奇卷之八冬初ありを也

卷八 冬 奇

題しらす

よ 4人 しらす

秋はし、時雨ふかぬが我なれはちることの
羨をなまか恨みて

今はとて我身時雨ふりぬれはことの羨さ
へみろつろひみけり

(第 壹 號)

此二首古今集にあり

神 毎月時雨斗りふらすしてゆきかてにさ
へふとが成らん

此奇校本にあり

此 余 讀人不知申子人丸赤人の奇あり其外処々
校合せかえらるる要きと曰

官 本也校本には此集依作合本写之以教本校合
及西三度然者宜為證本歟

文明八年丑六月十八日 李部邦高親王 花押
右校本雖為或家秘本予令敢 望被許一覽仍令

校合早皇経千載請款勿備地見厚

千時宝曆三歲次醜十月望 治部大輔平時永

一 後撰和歌集標注 四冊

坂沖阿闍梨注契茂真洞翁伝極西花園宗固考異

岸本平由豆流増注

此書は坂沖師真洞翁之考ハ古今集之例ホリ殊

子めつらしきは西花園の考異ホリホは慶長本

と名付る古写本を以てつくり流布のホリ伝せ

る事歎而首補入し且本文の誤同をあげたり此

慶長本ナクは後撰集の脱文廿二知る人ナカる

(第壹號)

一し由豆流の増注ニハ校正ニ和漢之書歎而部

を用ひたり

一 拾遺和歌集標注 四冊

此書も四珠菴頭沖阿闍梨と契茂真洞翁之ふた

りの考子岸本平由豆流之増注せしホリ

一 金葉和歌集 十卷

本集春哥し一 左京大夫経忠

山極本するの風のさむけは花の盛りニ成

そわつろふ 右兵衛督伊通

白雲と峯ニは升へて桜花ち水はふもとの音

古書保字會

とうそ見れ

盛宗母イ盛彦

花のみや著ぬるまの形見とて青葉の下まぢ
り残るらん

曰 夏と部

源盛清

卯の花を音なし河のなみかとしてねたくもお
うて返よけるか卯

大中臣定長

うの花の青葉もみへす咲ぬまは青そ花のみ
かはるなりけり

若原成通朝臣

(第壹號)

時鳥一翫ふきて明ぬれはあやなくよるのう
らめしまか卯

同 秋と部

皇后宮美濃

若はかまはやほころびてにまはあま秋の初
風吹たいすとも

若原家経朝臣

今よのは心おるさし月影のりあもしらう人
さそひけり

若原行宗

秋なりてまよふ麻さきしあめ城かいらたの

身子はしむかど

菅原伊宗

いまはしもほよおぬらむ東路の畠田の少聖

、しの・せすかき

菅原伊宗

川霧のたちじめつれは高瀬舟分やくさほの

音のみそする

太宰大貳長実御母

色深き井のわく水の紅葉を嵐の風のたより

よそみする

同 冬の歌

平 定信

音よたよたよとをぬらす時たかなまきの板

屋のよるの寐覺よ

神祇伯顯仲

風はやみとしまか崎をときりけは夕浪好鳥

たちおなくあり

源 雅光

あら地山雪ふりつもる高根よりさへてまひ

つる萩軍の月かお

同 哀歌

俊頼朝臣

我意は鏡に清くいはての
みせきやる方もな
くしくらしつ

神祇伯頭件

しらせはやほのみまゑに
袖ひちて七瀬のよ
とそおもふ心を

相模

あかふるもろき世ふかけり
なからぬ人の
あしりを命ともや卯

春官大夫公実

白菊のかわらぬ色をたのまれ
すうつはしや

(第壹號)

ま秋しなけれは

斐原為忠

雪の間よほのかみ人を
三日月のあかて入
し影そ恋しき

源 雅光

吹風またへぬ梢の花よ
かもと、めかたきは
涙ふりけり

皇后宮権大夫師時

人しれぬ意せしすまの
うら人は泣しはたれ
てすらすふかけり

源俊頼朝臣

ならそといふ身をは君かこしくさを關の名
そとも思ひけるかな

同 雜奇

菅原顯仲朝臣

年ふれとまよしらぬ 怪木はひなの宮古ます
をかひそなき

平 康貞女

いかてかはたもと月のやとらましひかり
まちとる候ふらすは

皇后宮美濃

よな／＼はまとらまての丹有明のつきせす
ものを思ふ比かな

坂井成助

すみよしのまつかひありてあふよりはなる
はのこともしらす斗りそ

菅原知蔭

ほの音はこの状しもそ鳴まけるわがれの遠
る赤る心地して

源行宗朝臣

いかにせん浮世の中よすみかまのほては烟

となりぬへき身を

覺譽法師

罪はしも露ものこらす消ぬらんふかき歎す
からくわる思ひを

勝超法師

和田津海の底のもくすとみしものをいかに
か夜の日とちるらん

源俊賴朝臣

よもの海のおみまたよふみくつをもあへ
へのあみよ引ふもらしそ

讀人しらず

花くきはちるてふことそちかりける

以上三十三首は官本に不載之

攝政左大臣家よて哀の心をよめる

若原為真朝臣

あふるのふきをうき田の池よろむよふこ鳥

うそ我身ふりけり

若原親隆朝臣

たのめてあはぬ念
急しあて心つくしま今まもたのむれはう

そいきの松はう

意の心を

琳暗法師

あくとつふととをしらけや紅の流子そある
袖やかへると

讀人しらす

いとせめて忘しきとはまはかまふるしかま
よそあるかちよかそへよ

以上四首書漏以朱書加筆有之此集相遠之處數
多有之

以貞敦親王去跡令讀合記相遠之處以朱付了
又異本子載る哥

(第壹號)

山の奇合は忘の心を 隆覚法師

身の程をおもひしりぬるととのみやつれな
き人の情あるらん

校本ヲ云

此集依 勅令以清本用捨合書写之叔及授合記
二時 文明十曆孟夏中旬

從二位友原教國 花押

一 三卷金系集 三冊

此編ハ後京極攝政良経公之真蹟を以幕刻し上
下二冊は亦三度目之奏覧本亦より三卷の

名を冠らしむ附録一冊は契茂直兄大人の考案
并に後叙も附せり天保九年十月直兄大人に刻
する処あり

一 後拾遺和奇集 二十卷

本集 其奇 平 兼盛

雪ふりてさふ井まふ山王子つかろしてか
は其のきつらん

此奇校本よりなし

同 其奇 清原元輔

美代をかそへんものはきの玉のちひらの瀧

の真砂ありけり

此奇拾遺集より入たりつかい

同 其奇の四 相摸

あやらしとみあるとたへのまらはしのまら
なとわいる物思ふらん

此奇和泉式部と集よりありつかい

平 兼盛

海辺浮けのあしのおいのよまわらみしそふ
万人のあしりき

此奇飛鳥井兼雅師の本よりなし又其奇の三

子

左京大夫道雅

渡やはまたもあふへきつまふらんなくより
外のふくさめそふき

此奇飛鳥并本より本集に不載道遠院

本よりまたふしつり

同 秋尋 荅原範永朝臣

明はては野辺をまらみん花すじきまねくけ

くきは秋よがはらし

此奇姪阿法師之本に不載

此集の校合飛鳥并采雅師は朱書道遠院殿并

阿法師の墨書右之三本を以合書写たりと并へ

たり本云

以一条法師定為本書写し此本去道遠法師依順

徳院御本墨表紙云々

貞治元三曆大旨中旬合書写訖 如阿

一 詞花和哥集 十卷

本集忘し却し上

右承門督家成家子奇合し待りけるよよめる

菅原親保

いかならんことの業よてが赤ひくへき急し
といふはかひなかりけり

同 雑の下

右兵衛督公の女よおくれ侍ける比女房よ
つけしやさすると侍ける返争よよませ給け
る

新院御製

いつるいきのいろを待留もかたまよを思ひ
知らん袖はいか子そ

老二首本集よ洩たりまた同じ雑之下よ

大江正言

思ひ出も赤きふるさとの山な水とかく水川
はたあわれありけり

此奇珍逸集亦よ出たり重出といふべし
官本也校本子は

此集依仰令書写し以数本校合及西三度然者宜
為證本歟

文明十年卯月廿四日 李部邦高親王 花押

清浦記曰

詞苑集和歌四百九首

新院而讓位之後故顯浦七京一人撰之天養元年
六月二日奏之奏覽之後返給而御製之々々
同和保盛經等中ヲ被座中為御使持參彼亭奏覽
布自固色紙ノ筆子自爭也金葉集付流布本茂才
三度本の奇は不除之此今之知人故也被院宣
去自十古以来不入勅撰集之外和奇等宜被撰集
者仍以執達如仲教長謹言

參議教長奉

謹上 左京大夫殿

六月二日

一 千載和奇集

二十卷

水集 秋奇之上

前編官河内

哀くて今宵斗りや七夕此花けりち里のつもる
ちるらむ

此奇金葉集の三ノ入たり

同 雜奇之下短歌乃及奇 源俊賴朝臣

世の中はうき身こそへる影ふれや思ひよつ
水とはなれさりけり

此奇また金葉ノ入たり

同 俳諧奇 題不知 空也上人

極楽ははか哉 ほとしきししかとつとめて
いたるところ成けり

此奇拾遺集子入りて仙慶法師詠とあり不
審

同 雑奇之中 法性詩性道前 政大臣

谷の戸きとちやほしつる鶯のまつよをとせ
て其のくれぬる

此奇拾遺集雑部に入たり

同 方九哀端奇 中務卿具平親王

春くれは散よし花も咲けりあわれ別のか

からましかは

此奇詞花集子赤蔭車門奇也とす詞不同し

不審

同 卷十四 意奇の四 荻原実方朝臣

牛の糸子玉ぬく露よあらぬやまたねをよめ
ておきよけるか

此奇また詞花集子入たりいか

同 卷十六 雑奇之上 清少納言

うはこほりあわよあす
すむ終子やるふ斗りそ
るしもな水はあさ

此奇後拾遺集に入たり

同卷十七雜奇の中

荻原季通朝臣

いとひても程思はるしわか身かなふた、ひ

まへきよ世あらぬは

此奇詞花集に入たり

以上八首重出の奇也また卷十四忘奇の四子

荻原清輔朝臣

あふきはいなさ細江も身をつくし涼きしる

しとなき世なりけり

同卷十短奇

皇太后宮大夫俊成

我とも君があかきの呉叶は子世に成代の

かけとそふらん

右二首校本に無之由又忘奇の四子

荻原清輔朝臣

あふかきあさまの野合をさかやかる残のた

もとまかへはぬれし残

此奇校本に載せて流布本にふし此集に流

布本は本文よりして誤字商字耳またあり

右校本雖為或家秘本予令敢懇望被許一覽仍令

校合了是經千載請欽勿備他見焉

千時 室曆四年歲次甲戌陽復既望

治部大輔平時永 花押

一新古今和奇集 二十卷

此集官本云

文明十二曆初種上旬候依作令書寫遂數々度

校合辛

權中納言友原雅康

卷之二 奇之下 從是以下飛鳥井本云下し

題しらす 中納言家持

古里よ花は散つし三吉野、山の極はまた咲

すなり

題不知

赤人

急しとは形見よせんと我盲より一若浪今

盛りなり

卷之三 夏奇

時鳥の心をよみ侍りける 題昭法師

子規をかしをかけた思へとや光の寐覚よ一

都すす

卷之五 秋奇之下 題不知 惠慶法師

高砂の尾上よたてゑる麻の香よここの外よも

古書保字

ぬきし油かほ

右之奇在阜本

右八代集為備證本以教本再三合校合し了

文明十九年三月下旬

牡丹花 花押

卷十九七雜奇之中

題不知

紀貫之

いんせし磯辺の松の葉よりたちよる浪の
かすはしるらん

卷十八雜奇の下

雅經朝臣

たはかたはせきあへぬ波のいくよし山にか

し致承の袖に秋風

右之奇在飛鳥井家本教本に無之

右集以黃門入道采世遺墨に本勵瞻写し功早件

本以撰者に真跡并教多に本亦被比校に官成写

之由被書干紙尾尤希有に證本也 亞槐菱 函

手新古今被直事

春下 太神宮の百首奇たしまつり侍し中よ

大上天皇

いかにせん世よふるふかめ葉の戸はうつら

ふ花の葉と書かた

秋上 同詞

烟霧のきかのかや原山丸は見たれてものは

秋そ燃しき

以上二首被出

秋下

帝製

さししさは丹心つ杖のあくもり

可被切入

村雨の夜もまたひぬまきう葉は 寂連倚下

左出門督通光

明仄や河瀬の浪のたかせ舟 此舟の上

恋奇の三

多のめすは人きまつちのやまなりと

可被切入

定家朝臣

あちきふくつらきふたしの聲もろし

此奇の下

故撰政

なまゆえと和むひもいれぬ夕たよ此奇の上

今此新古今集ハハよしえ久の比はし和奇所の

輩よおほせしふるき今の奇をまつめしめては

上丹つからえらひ定めしより此方家々カもし

其そひ山のとししてみそち奈りの春秋を過した
水は今更あらたむ一きよはあらぬ先しつかみ
之を見らるまおむひの風晴ふるきもあた
らしきまわきかたくしなくのよみ人高きも
賦しきますしかたらしめてあつめたるところの
奇ふたちなり教の如きはかるまつけては奇と
とよかなるましあらす其うち見つかうが
奇をいれたる事三十首まあま水り道ふなる
思ひ深しといふれいか集いやつれをいへ
りみけるへきたはよそ玉の台風やはらがふる

昔しは狩野辺之義しけきとわかさもまきれき
いさこのかど月静かなる今はかへりて森の梢
深き色もわきま一つ一し若しより集を抄する
ことば其まとなきまじしあらずされはすへか
らくしれを抄しいたすしといへて撰政太政
大臣子勅して假名の序をすつらしめたりき則
は集の詮とす然るをこれを抄せしかはもとの
序をかよはしち井るへきまあらすこれまよ
りてすへしの奇之至悪詠に教斗りをあらため
なすす然のみならすたちまちよむとの集をす

古書保存會

つ一きはあらぬや更にあらため見かけるは
すくられたる又して天の浮橋の昔しをき、わたり
八重垣の雲の辺にそまんともかりはし水を深
きまといひらきつたえはるがなる世々のこ
せとなり
此註以六条宮御本写之在彼撰定之旨尤以龜鑑
也其時此被出之奇以未消去是也此外於古書本
相違事有之以來此直注之皆写彼御本者也
一本云新集當時就彼證本聚若干古本遂數々度
比較改正其謬於今者取可謂秘本隨一者幸

右旨趣且依 綸命具お記也

岩文明十年辛巳晦日 從三位友原基綱

此校本本文之頭書云牙 雅經々山定家以 宗隆

以十有家以 古書門 皆以上撰者五人と云以校

合するよ各其略字を倍書し飛鳥井家本は以朱

書及再校此原本精撰を極めし文也

一 新抄撰和奇集 二十卷

雜奇之四 寂蓮法師

風吹は濱松かえの手向草はく上まて下が年
のへぬらん

古書保存會

古書刊行所蔵

此一首下之勺袋斗りこしぬさと散るらぬ
此奇と外差支の相違不相見且流布本も誤写關
字至極少ふく克校合相屆たり官本も云
右以撰者真跡並教多證本等被加校合之即本依
勅定令書写之西三度讀合沈
干時文明十年七月十九日

藏人頭右近未堆中将兼原實興 判

廿一代集中刻本以此集可為善本者也
一 續後撰和奇集 二十卷

卷第六秋奇之上 紫式部

秋の初は山田の菴に編妻之ひかりのけりす
も里あかしけり

卷十二恋奇二
亭子院よさふくひける女もつかしけり

源 嘉種

なうき旅をあらしうの浦うゆく燈の煙りは空
まよやのほるらん

皇太后宮大文俊成

ほしわしぬあまのかるゆき燈たれし我かり
ぬるし 初の浦あし

古書刊行所蔵

右之奇校本下ナシ

卷十六 雜奇之上

後法性寺入道前関白家百首二月

廿の冲をそむきてみ水と杖の月おなし申子

そ狩めくりける

右之奇本集日前参議忠定の奇日つき讀人

を不載校本日皇太后宮大夫俊成とあり

卷十七 秋奇之下

大納言成通

おしそへて紅葉の色子成子けり時雨日漆ぬ

山しなけ水は

在時雨川下みれと狩上流布本下不載

建長七年五月十六日申風右筆慈終也字之切

特進前至相戸部尚書友原

以校 葵覧之本漸々校合

中凡筆頭狼藉多不被見解撰者之自筆何不備

證本哉

祐 覽 花押

文永二年四月付屬太夫為相之六十八采門 抄

一 續古今和歌集 二十卷

秋之上の部

古書刊行會

宝治二年百首、秋夕、入道前太政大臣
ふかむれは心はおろるなむだおいかなる時
そ秋の夕書

右二句と初めの心をすゝろと比較ありし
ハ寧よとわりまうそ

釈教の中題しらす 天台座主隆覚

さたがももさき世の差をさとりはやみの
うつゝ子けや迷むや

此作若隆覚にあらず隆覚とす

羈猿の中 猿の心を 道因法師

思ふ人ありやと、一は都鳥まゝもしられぬ
音お、みそおく

こは道因法師にあらず道因法師ありと此
余洛題誤字落字に、あやまちを多くたし、
此たり、あやまち

右和奇集一冊、名謹蒙、鳳、衛、不、願、在、道、証、謬、馳、在

筆、拙、全、遂、全、部、に、写、切、け、致、再、灌、に、比、校、而、已、干、時

文明十一載、黄鐘上、漸、台、嶺、釋、准、三、右、尊、應

一、續、拾、遺、和、奇、集、二十卷

此集卷之方十七、雜奇の中、子、從、二、位、能、清、を、侍、道

古書刊行會

能清とし道円法師と道因法師と誤字し類ひ処
々々被加校合

右集以教本令書写校合云々尤可為證本依
勅命加與書者也

文明九年十一月廿八日 右兵部督友原雅康

一新後撰和奇集 二十卷

秋奇之上 平宣時期臣

たれがまた秋風ふらして古里の庭の浅茅の露
もはらわん

急奇の一 僧正の息

おのつからかけても袖よしらすふよいはせ
の杜の秋と自疾

同 三 順徳院御製

濱千鳥かよふはかりの跡はあれとみぬめの
浦は音をのみそ鳴

同 鎌倉右大臣

我せよを松浦の山の藁かつと玉さがよたよ
くらよしもあも

同 四 賀茂を負

秋ふの松乃ち里よよそへてもしらせや

右集
書
保
存
會

古
書
保
存
會

せましつる恨を

右に五首校本に水赤きよしを載す

此集詞かきのちかひ年号の誤字また奇の遠し
しあり

右集以教本令書写校合云々尤可為證本依

勅命加梁書者也

文明九年十月廿五日

右兵部督友原雅康

一 玉葉和奇集

二十卷

此集流布本誤字処々多有之校合致極調ひたり
右集以教本令書写校合云々尤可為證本依

勅命加梁書者也

文明九年十一月廿八日

右兵部督友原雅康

一 續千載和奇集

二十卷

羈猿の中

世首奇たてまつりし時 法尔定為

とえわゝる夕一の雲はあとなくてあらしよ
たとるのよの中心

忘奇の三

是法法師

相坂の岡よりおくを尋ねみてとえよかへら
ぬ道はありやと

古書保存會

古書保存會

同

五

新院御製

つらきをもけよおもひしは中ならはひとが
く人をしたはさらまも

雑奇の下

前参議雅房

何やえよそまきもやらてすくすらん心とま
へき世ふらぬよ

右に四首今集河たりしより書かえり又

春奇の下

左近大將為教

いよし一の書片に極たぬしあれは又喜よあ
ふ時代そしらはく

此作者為教師にあらす冬教師也此余汝題誤字

殊に多し

此集蒙 詔命不日終写切教度遂被合可被比

證本者中

干時文明十一紀孟復中甸擁中納言友原直胤

一 續後拾遺和奇集

二十卷

本集秋奇と上

友原元真

嵐吹太山の星の女市花うしろめたくもゆる

今りあ所

同 冬之奇

前大納言経

古書録存

古書録存

古書刊行會

とは、やな小野、桑かまおのつかり通ひし
道は雪源くとも

右二首校本に不載之

此集依 勅令以請本用捨合書写之教及校合

記

干時文明十曆孟夏下旬

從二位左原教國 判

一 風雅和哥集 二十卷

本集甚之部 前大納言経経

あやの草はし人となし山家のとはし浪木す

五月雨のころ

此奇、前大納言経経の作よし、経は誤りの

よし

右之外所々校合有之、虽有之、詞と悉題等之類は

干し、さし、の遠し見へす

此集叢 勅令不日終功教度遂校合可被比證

本者年

干時文明十、二祀林鐘下旬

從二位權中納言藤原宣胤

一 新干載和奇集 二十卷

古書刊行會

此集之校合以集字記之年号官名の相違又「路
題或は假名遣ひ等多し

忘奇之一 掃 麓 隆

いはいし思ふ心のうちりしからみよ也きあへ
ぬ物はなした取りけり

此作者範隆のあらす道彦法師より

雑奇之上

迹懐百首奇のやは炭竈 寂蓮法師

五すしりぬ世よ十廿かまのいつまてが顔の
烟りきよそよみるへき

こは寂蓮法師よりあらす岸在法師之誤字ならん

欣

雑奇の二は踐たりしとてかへられしは

惟明親王家の十五首奇の前中納言定家

天地もあわれしるとはいよしへのたが偽り

そしきしまの道

此余不證上人を永證上人とし津守往国を国往

となせし如き誤り「奉るよ」等へす

以官本阿野前大納言重顯卿筆蹟校合了

一新拾遺和奇集 二十卷

古書保存會

嘉元二年

嘉元百首奇奉りける時從二位為子

聞之ししたれを名古首の望の名そ行あ小道

をいそく心よ

此奇嘉元百首や之上しみえたり

右之外誤字を正せし余も遠ひたし

右集以教本合書写校合之尤可為證本依

初合加其書者也

文明十年十一月廿七日右兵部督友原雅康

一新集和奇集

写

二冊

此集ハ南朝之撰集にして刻本の流布ありと古

写本と得其真書を見たり今之本は浅せしの升

方りす史学の補助に証する慶壽院法皇ハ兼文

謹命辨する子長慶天皇之御書は百へき式と思

ふ子より此の録して考証に備ふ

斯集南朝慶壽院法皇御在位の時

詔上り叙父中務卿宗良親王被而処合撰也後大

王則宗近臣部卿為世卿之外孫也為子母世卿三女

也依得付攝應此撰集

作者皆以已逝無終現存者唯西三輩而已所謂上

古書保存會

野大守懷良親王右近大將長親法名耕堂魏光弼等
也師名魏王致坡卷与博境有餘呼鳴魂虽歸於
泉下名孤存陵上矣故者之骨未腐於土中名克識
世上適為後世彼知之者唯和奇人而已：斯語
誠宜哉莫斯詠奇者余知故人之風騷午後生晚進
之志尤可嗜者此道也道于豈不難於致乎
應永世二年二日
秋生源叟志統志
于時勢州安藝郡栗真庄南陽寺泉昌庵行年六十
三同四月三日以耕堂自筆本校合了此集作者存

者總餘三四人刀皆已畢梅隱祐常中務卿性成親
王愚哉上野大守懷成親王負子内親王右近大將
長親已上五人而已存但梅隱今年三月三日薨負
子内親王同十二月薨了
以迄源尊滿之及書寫之但至篇定者刀刀也遇幸
漸惶：：
永享十二曆仲春上漸於十周防國高尾山下和葬
開禿筆了
栗阿智明今年七
以上本竟正四年十月七日書寫之一校之
依負源貴欲書之
隱士欽玉卅七

古今和歌集秘注

写

一册

曲成子撰

此書ハ藤原定家卿ノ甲シ給ヒシ真應本子ある
処ニ真名序ノ和辭ヲシテ則真應本トハハ真
應二年子写す処ヨシテ此本ハ定家卿珠用シ給
ハサヨヨシ終キニ見セ序跋トモヨク
一 古今和歌集正義 十二册

香川長門介景樹著

卷一序正文卷首假名序ノ奥子云

此序ハ顯昭法橋ノ古今抄を依ル或家々子傳

ふろ起カ古写本又舊キガキリカ到ル共を彼此
求め集へし其異同を正して其差もを撰ひ来
て姑し正文とし其取捨せし所ハ其文ノ頭書
子本のし侍る由とより其謂ハ其出所に至りて
ハ本注ヲ辨セリたまし其中心ハ「カ」爲案
と申し試升たるは口を加へむき侍りぬさる
ハ西女之出るを待月と扱ふきのしわさ子侍り
也めさかしらふりと答む一からす次は天保三
年九月ハ遠論子は大回弘仁より詩学盛人子し
乙覽平延喜之時子及いて殊子甚しくして大和

古書保蔵會

此一冊多聞心落城に刻不意感得也秘藏也此時

元龜二年五月 日

一 和泉式部家集

本殘合 四冊

和泉式部一小野宮実頼公五世太等大式高遠孫

筑前守資高之女上康内院之妻房也

此書八世に流布する和泉式部集和泉式部詠九

といへるもの、類ひは及らずたへて世に未

きものあるを平由豆流のふるくもして本に平

春西自筆之本と名法印自筆本發原安富朝彦

自筆本外子和泉式部集と名付るもの二本とを

もて校合しぬ殊に續集二冊は世にめつらしき

ものを藤原元旌のもてるを原本として校注し

本續二集共子和泉式部二自撰なる予疑しから

ぬものふれといかある子が原本子和泉式部續

集と題せりそをふかして廿つりはふかか

面白し見へたり

和泉式部一世の人の知るが如く奇ハ小野

勢子もおとるましく殊に此頃の女の秀方なり

古書保蔵會

は和漢子わたりたる古字ともおほくよみいし
たるを見はおろつかり子字肉の一筋ともなり
ふむ

一 実方朝臣家集 一冊

四方奇垣標注校正

此家集世に傳はれる本は誤字脱文のみよしよ
みかたきものなるを古写本の世に希ふる本を
得て校合しかつ此集もれたる奇の世に勅
撰家々のお融など載せたるをばあつめし附
録せり標注は古字誘新等おとくはけた

一 曾母集 一冊

曾根好忠家集

此集はふおく下河辺長流校正されしを賢中阿
刺梨にみつかうか、水し本に女なよりて外
子古写本三本をとり源躬弦平由流茂原寛元三
人と校正せし本をよて上梓せり

一 覚性二篇親王集 一冊

二 和寺宮入道覚性親王御集

覚性親王和信法皇羽天皇御子皇泉殿仁和寺

古書目録

五代紫金山寺所室所事なり

蓮瑞子生觀集入道二忌親王覺性詠と書す春之

部子溪流終花和奇并子小序ありて

かほるかさかけしの水子さまたて、流そよ

とむ方のさくらには

一 忠度朝臣詠歌集 一冊

薩六守平忠度朝臣集

此集、詠題九十一首詠奇一首首也

河原院にて故々鶴といふ事其人々よみ侍し

示

しはかまの首の跡はあはて、浅茅かけら

みうつら鳴あり

此集の事は左に桑書子譲りぬ

右の本は薩六守忠度の女そん後成卿の汗以つ

かはし侍李し白筆の本を大樹より出され兵部

卿を誅綱卿子かきてまゝいぬすへきよし仰らる

然るに午皮巾の字庫よりして後世の證本みそふ

一人か為見しかきまよまかせしうつしとしめ

よ見あかせ侍りけるとかや

文明十六三月の三日柳林荻原の山と亭

古書集

一 夏想国師和奇集

厚

一卷

智曜洗石輝師集

夏想国師ハ天龍寺ヲ開山シテ仙回輝師ニ法

嗣スリ和奇ニ達シ茶道ノ式モ定メリ觀應二

年九月卅日寂此集ハ策秀和尚自筆今妙心寺大

通院ニ藏セリ

厚

二冊

一 中務卿親王即集

一品宗良親王即集

宗良親王ハ後醍醐天皇カ二皇子初メ妙法院ニ

皇子入り尊澄法親王ト稱す元徳二年十二月十

四日天台座主ニ任レ元弘乱ニ退轉又建武元年

七月西任延元ニ乱敷令ヲ被シテ還俗其後征夷

大將軍ニ任シラハ三河遠江信濃等之各州ニ即

假居スリ七日夜ヲ驚之道ヲ専ラトセラる間ニ

中院准后親房師子左大納言為是卿等ト即贈答

之和奇ヲ始メ輯メシ処ニシ此本ハ流布本ト奇

數ト多ク殊ニ古写ニ書書ナルヲ以テ夏子書

中院准后升世侍一奇中子

石清水ヨキヨキ流石を転本ヨリ子大ニシト

之本ト以テそめしか

とありしよ

石清水流は子木らぬわが人のあゝろ成ゆみ

又はれとそみん

明德二年九月廿日鎮西より便宜に申替仰親

王懐良言

日はそへてのかれんとのみ思ふ身よいと

夢世のみにしきとあな

しるやいかはよき秋風の吹かう子菰もとま

らぬわがこゝちかな

同年十二月に來し後又便宜にかくや巻し侍

し

とよかると道ある君が身代ならはふとしけ

くとも誰かほとわん

草の木もあひくとそす木のころのよを秋風

とあけがさらふむ

此本書 先師兵部卿成親王孝宗筆跡也教弘

相傳也

省享徳政元仲冬廿日 多々良朝臣 花押

一 毛利元就家集 写 一冊

贈從三位貞隆守大江元就家集

古書 保存 會

此集は近臣大庭加賀守覽兼書あつめしむ聖護
院道増進后所覽して三光院内大臣実澄公が判
者せしめらるゝ処之書あり中々発句ありは
軍村法橋紹巴は是又判せしめ給ふ此元就朝
臣は戦闘の中は生水給ひて武道は長し又和奇
に達去りし既し集外奇化は撰まぬ給ひし奇は
書柳の系くり返すそのかみはたが小手巻の
はしめたるらん

一 里村玄仍集

連奇師法橋玄仍と和奇集也

原 一巻

首 雪中若菜

いかにわれのはらの雪はあつつけししたも
忍ぶる若菜つまじし

尾 祝

千世ふへき美がかさしよこのはるそ年折は
めつるやとの梅は枝

或人依処望深愚詠者也 玄仍

一 貞徳家集

原 六巻

長頭丸 松永貞徳集

此集一名道遊愚孝門人以悦之輯也

延宝五年己十一月十五日以悦八十二才之序ありて貞徳翁一世に予取らるるに述る連奇を培し和奇の門子入られし亦り以悦又和奇の道を此翁の字ひて其ころ名ある人なりすしてよけ集中は
病ふしてかきりふりしか又さふた耳かち
み何れは柿園の養をつみ
我園の菊おもみれは歳々命またしの秋もき
えそかへなる
かたわらみ何れを以悦

桃をえし九十一りの子世もつめまたは秋の
しらみ久の池
此集四季志雜の升しして三千余首あり
一 古学先生和奇集 一冊
仁研伊波雜集
元禄癸未のとし二月中旬三日自跋
此集惣斗二百六十八首の内鑿六十四首其中諸
集七首の中は殊に面白く覺へたりしは
初冬の比小山は雪も初てふりけるを升し
今朝ははや都の雪も冬めきて春き山辺子寺

ふり子けり

一 元凌御記

二冊

靈元天皇御集

嘉永元年三月既望板倉河守字勝明假名序

此御集ハ享保六年九月廿七日子初り同十六年

十月十八日子終る迄く修学院赤山荘に御記を

集め其御当座之詩言をも載せられた也と和奇

をむねとせらるる日雨亭に藏板なり

一 自撰奇

写 一冊

本居宣長之集

此集ハ安永五年に始り天明三年に終り

卷首望路鳥

鳥の声も夜にもる事はゆく人とまる相坂の

刃

一 三草集

三冊

東名少時定信朝臣集

予一卷 五七十三首あり

文化四年冬自序ありて享和の初め比より書

記す

うきものとはとへて戻はあらしくおもが

古書保存會

古書保存會

けみするおのよもきふ

文政十年十一月十五日 定和あそまおらす

梁翁書

亦二卷 志く良 百二十八首

こは文化しはしめ比より致はましのかきとい

む

ひとかたよいと日子はしそハを薄これも升

とりの喜雨のや

文政十年十一月廿日あま五りみつからかい

七定和あそへまおらせたり

楽箱

亦三卷 あさ知 六百三十五首

致仕の比より文政七年の比まきさいさ、か

しるしぬ

楽の戸人いそとはぬさ、ちふの未系と藏

も月はいとはす

文政十年十二月十三日定和あそまおらす毎

卷定信朝臣の自筆をもて梓行せらぬ以上九

百三十六首也楽名藩に藏板

一 琴後集

初二 八冊

平 春海家集

古書保存會

古書保存會

此春海之奇は廿の古字家ノ奇とはかわりて万
系集之詞を用ひずやすらかよしして涼く味あり
二集ハ文集也春海はわきて文詞もたぐみあり
出しり城もろとしよかり詞を復にとる一集の
文尤奇絶あり

一 小野古道家集

一冊

清水濱屋 校

小野古道ハ縣居真洞門の高弁ヨして奇はたく
升力ハ雅文ハ短奇はよくせり

一 歌城奇集

四冊

小林歌城家集

嘉永二年暢月篠崎彌漢字序

奇城ハ小林田兵庫荻原元雄号子駿徳川嶺下

士子して和奇を能くす巻一書巻二書巻三

急 巻四 雜 追 嘉永五年春二月上木す

一 景山公吟咏抄

写 一冊

水戸中納言景昭卿集

舟昭卿号烈公又景山贈大納言此集ハ天保二年

正月より同十四年五月に到る其名ハ和奇七十

二首詩七首ありて贈巻あるハ即吟または郎

古書保存會

家来へ下されたる歌多し忘奇は一首も見えず
四季風流し而詠もおる希也實堀子録しの奇
のみちり

秋懐旧

通し世の盛りを今も暮久の花しのふ決た
ちる淡かな

進思を志と銘したる境を冠りて

八千景も限りしあはは舟をすすし 巧世ぬ名
ろそ世くみ傳へた

一 桂園一技

拾遺や四冊

香川長門介景樹集

嘉永二年春渡志之序外

此奇集世に流布あるを以て略之了

一 大河丸

一冊

中川望南亭自述

撰者之自序あり此篇ハ桂園一技より九十七首
抜萃して光魁の難ま自述の巻へしふり天保四
年六月廿一日しふり由桑書すみへたり

一 箱養集

二冊

本店大平家集

古書保存會

古書保存會

文政七年四月三井高匡之假名序

一 一村薄 二冊

高野朱根之集

大江春平之假名序

此集上卷は長崎短奇下卷は文詞あり日記紀り

等あり卷首元日

長閑なる春まぢつけし国の名の浦字いはふ

きふの樂しき

一 松戸詠草 四冊

桂溪法師家集

一 糧之舎集 五冊

鈴木重胤家集

重胤ハ淡路之産ホリ平田篤胤の門子学し古学

子考し其名高くと又和奇は殊更之達者ホリ日本

紀傳を著すむと既于一百八十余卷ましても盡き

三西巻を以て脱稿の心得なりしが此著書の夏

よりして禍々洩き起し文久二年の冬其子武五

即と共に刺客之為に墮死して果ぬ此道志し

ある輩は大いに惜む処ホリ又此集は其以前游

歴中遠江之荒井の駈子しはし有し此飯田河某

古書保存會

か家子と、め置しを見る其中子

税

位山高きよのほる藤より千世と伴ふたつ

の村鳥

今年より千世の初声うるはし九摺井子次う

む天の雛つる

一 桂蔭

二冊

渡忠秋之集

八田知紀の序慶應三年八月源包智之後叙及志

秋之男忠純の附跋あり又元治元年三月三日松

浦道輔所撰場園記以漢字記

一元和帝御詠草園書

二冊

後水尾天皇御集

卷頭 立春

梓弓之主との国はわたりたさむ道子

春の来ぬらん

春 二百十八首 夏 八十八首 秋 二百三

十首 冬 九十首 賀 四十三首 駕旅 十

三首 恋 百三十四首 哀鴻 三十三首 雜

百四十九首 紙数 十八首 神祇 十首

古書保存會

古書保存會

古
書
保
存
會

合計 一千二十三首

又一字烏丸光廣卿へ御談合御謙退 之一首

ひらけ種文の道よそいよしへよあへらんあ

とは今もりのしにぬ

一 靈元法皇御集 軍 三冊

靈元天皇 御撰

此御集巻夫 寄氏祝詞

春の色のおを人草そふひくめりむへ安國の

長閑ふは世よ

春 六百五十首 夏 二百八十九首 秋 五

百十首 冬 三百四十六首 夏 三百八十三

首 雑 三百八十八首

合 二千五百六十三首也

一 晴信集 軍 一冊

武田大膳大夫晴信入道信玄集

信玄は法号法性院様と云

早春山

今も於言章ふからよみよしのし山子や春の

立初めけむ

浅間明神の神大といえは様を

古
書
保
存
會

後し梅は白洲の花に白ゆふをかけた
神の子は

一 蒼山和歌集

二冊

秘園蒼山大人集

元治元年春頃茂野主成隣及難波梅子の所序

此撰者ハ賀茂直元三門子学ひし人ニ

巻頭 主春霞

今朝よれは神代の春は乃かへす
天の香久山

上 四百九十三首 下 四百三十六首 長歌

九首

巻末は安政二年霜降月廿三日新造内裡遷幸之
長哥を載せたり

古書保蔵

古書保蔵

古
書
館
存
會

歌学之部

一 勅撰名所和奇要 一 残 一 册

毫 山 天皇宸撰

此勅撰名所和奇要并は其巻全部亦る処素人散
夫之今傳ふ其は巻十九之一巻也宮中京中
之函條子し其奉什給ひし箇処は其所在を古
書子抄出之和奇及詩文を等を記し給ふ引用書
は李部王記師遠名所抄之外珍貴書目珠子多
其名処之箇処は

大内山 十二門額 禁中諸門 八省院 豊

古
書
館
存
會

洞院殿	井殿	倉院	烏井	西官	廿三條	松殿	京極殿	鼓松殿	文章院	正院	三條內裏	一條院	釣明院	院	藤姑好山	神祇官	樂院
山御門殿	大畑御門殿	深橋立	滋野井	花園	御子丸	深殿	鷹司殿	干草殿	菅原院	南院	六條內裏	二條院	河原院	朱雀院	園韓神社	紫震殿	
東寺	堀河殿	六條若宮	廿將井	梅園	北邊亭	鬼殿	高倉殿	枇杷殿	小松殿	北院	中六條內裏	三條院	花山院	高陽院	茶園	大極殿	
西寺	八條殿	弘誓院	內記井	地真	小野宮	小六條殿	町尻殿	九條殿	紅梅殿	中院	中六條院	五條院	法興院	堀河院	以上宮中	五舍	
	三條殿	八條院	鴻臚館	鴨井	四條宮	小一條殿	大正殿	款冬殿	高松殿	勸學院	東六條院	東北町	東北院	閑院	神泉苑	菘戶	
	常盤		穀	山井	飛					榮學院			本院	亭子		雪枿	

古今圖書集成
 禮部典章
 卷之...

古今圖書集成
 禮部典章
 卷之...

古書傳存會

勅撰名所和奇要抄方十九 一巻

日野中納言紀光以傳來也中適借請之白書写し

畢

中永四年九月五日 在中並経逸

又三条象之本子云

右勅撰名所和奇要抄方十九借乞或藏書合写之

件抄為

龜山院御撰之由故公藤原注之云々

天保七年正月二十六日

皇太后宮權大夫藤原朝臣実萬

一 勅撰口傳抄 一册

後宇多天皇宸撰

此抄は後宇多院之御筆を降めら水七故方秋門

院子まおらせらる勅撰御而首進上口傳又明月

の懐紙之予人丸の影之予を載させらる巻の頁

子正應六年三月一日かよ又ふかく箱の底にお

さめて末の世子傳るべしゆめ人子みせら

水ましくはとあり

一 秘藏抄 二册

凡河内筋恒撰

古書傳存會

古書保存會

卷首は古今打聞新撰撰とあり奇の本とすへ
き多四十一條短奇旋頭奇俳諧奇は五十五條
朗詠は部七條十二月吳名之奇年の賀千子振の
多四條真澄鏡の多鳥戰草木雜之部廿八條書士
十名等と記す此廿七奇は道は志あらん人は必
す見るべき也心得の多多し各奇をそへて初心
はよく心得すは體裁殊に直敷書也
一 御聞書 厚 一冊
藤原基俊 撰
此編は和奇のよ升かたよ初假名之多奇をよま

ま心得の事題の心得の多病をさる一多事長奇
短奇旋頭混本廻文隱題折句疊句俳諧等之事禁
忌の多さよる一多事名処并とは之多奇合の
復其全心得之不々を記せり
右秘書者愚考以一身之才所注意也上古奇心髓
恒口傳雖如雲霞徒書詞旨心更寂寂は墨友為未
代嬰兒注軸一卷大綱成不可出此支和奇者金
依教訓已心讀之状も不存此趣者有法病は科為
除其科為之者也皆粹心底不可及他見完覽は
左東門佐基俊 判

古書傳存會

師近より相傳に秘書一巻授けり奉り此御心得
のたぬましし此は羽林平定家申候より外は人
々名きたる聞すふかく函の底に隠して此を
あるましし此元かしこ

釋阿判後成心也

年比浅からず此道は心さしの此は水ける時又
いまた家の人にも名きたるましかせす此此しを
ゆるし奉り此子一人よりほかは施るさ依まし
く此也奇の秘事おまくとやせ共是程に深き浅
き心得やすき物は此に付す此任る玉津島の御利

菱原氏女俊成の女

生とおほしぬしよ阿ふかしこ
此し思はれ此かしこ
此秘書は子より外にゆるすまし秘事よす此
を一子に承けしや一は責めを子としてあつる奉
る是を御覽せんた此とよおもひおしてとふ
ら此も承へきよし申されしよ阿われとかやの
こりなくあつりたしまつる此あり阿ふかしこ
書を相傳せんとして配請文をかき侍りた太ふく
書うつさ勢ゆるすことば此ましく此無心の人

妙阿判

古書傳存會

古書明徳堂有書會

書うつすべからずしかる可ひたかやうに書くと
とおはゆ也定かしり

起請文と申

為氏判

正安元年二月十七日

前大納言為世判

一 源家長記

写

一冊

此記は家長朝臣は建仁元年十二月後鳥羽天皇
和奇所を置て此源家長を閑園とせられ後源清
範鴨長明後原秀能を奇人とし是より五年目元
久二年に析古今集を撰われしを以ても其比和
奇の達者ありしを知るべし

此書は建久九年正月之比より兼元元年十二月
に致る迄節會公の行事を初め其規式を記し和
奇の贈答殊更に多く其比は名人そろひし其
奇は世々の撰集に載せられし多く女將雅経も
四位あるされし女將とまりたりしかは津
つかわす
三笠山雲丹をかけた木をか、これはつ惟宗の
はるのり末
又家隆朝臣宮内卿より得るものやつかはす
窓のうちをけふ、み、ても敷島の道の勇も

古書明徳堂有書會

るしかしふらすや

友初は友勝寺へ御鞠つかはされき御侵は友範

清あさ迄をたしし力して御鞠不舎人にもたせ

て云々此範清は西行上人のやさはあらは諸書に

義清憲清ふとせしは皆誤りよやと覺ゆ和奇

之心得好なはへきと極き書也

一 俊成は九十歳頃記 一冊

此記は和奇所におおし霜月廿三日は賀を賜へ

きよよりまつ屏風の奇として四季の詠三首つ

之題を賜りて各々奉られし十二首の和奇を載

也次は其日よまつ管絃の楽迄おわりし和奇を

被謾せらる

百年のちかつく杖の世々の詠は撰ては升内

る光の故か如

所製

面とせよちかつく人そおほからん万代ふへ

き夫が御世よは

新所

此条廿二首あり作者は此頃秀逸揃ひし撰文

左大臣太政大臣定家朝臣雅経知家長明具親成

家秀能頼房資寧道資兼家経道公経範光通光通

具家長等なり

貞治三年八月廿三日書寫了羽林郎將友為尊
備前少時獨敵年比心よせある中よ中が満美を
かそへ笑奇をせくらる其志しをむくひんかた
め此一帖を思ひたち付ぬもとよ約おれくし
き筆のつかひは癩疾さえうちそいた水はつと
一升くろしけれと郵寸志をあらはさむとして
其品をわすれたるよなむ元祿十三年の年よひ
十日あま玉のほとかき終りぬ

西槐老散水原 判七十歳

一 和奇書様 写 一冊

京極中納言定家卿 撰
此編に記載ある書式は中殿御會 院御會
内々席御會 后宮御會 社頭御會 以上和
奇書様之り 和奇會次序之り 題讀様之り
濟人名之事 以上作法之り書記せれる中
其書あり
此一巻中納言入道自筆なり尤可令秘藏給
前大納言 判
京極中納言入道自筆本相傳之間為支證取宗匠
之書法 法不隆削 判

古書傳存會

是より一首奇二首奇三首奇之書様題之書様等
を載ら北また契書あり

此一巻法性寺家臣為後朝信實朝相傳之秘本也

云々輒莫詳外見而已

明應三年九月廿六日 権大納言宣胤

一 建保中殿御會之記 一巻

此編ハ建保六年八月十三日中殿御會之記ナシ

乙御題は池月久明右大臣正二位道家公之序次

子歌あり 秋の他の月如松もよく干代が光りを花の如

か升とは升也

此時和哥の作者は三十一人ナシ右ニ詠あり契

子は管絃御造ニ真圖を附録ナシ

一通守記 一冊

中院権大納言通守卿撰

此記は應永十七年八月十九日禁中三席和哥御

會之記也

右之一巻岩倉中納言具起卿御心持之奉而在彼

而家蒙千種中將有統朝臣之恩免走書写之奉

享保元年中丙八月初九 宗氏判

一 三光院御口義

三条西園澄卿撰

写

一冊

此篇は奇道心得之書にして書中五畿七道といふは都の七の以きいふと心得一きりあり五畿七道といへは日本國中の如く皆人おもへり又為兼心達者にしてはありしかとも風林ありかりし也と其外俊成以定家卿後京極成等よりふとをゆめ奇のよみおたおもよし記されたり

一 和歌源底秘抄

写

一冊

此抄は嘉元三年十月三日定家卿四代に孫忠幸

入道慈寛より権律師源俊へ授けられし処に和

奇の傳書にして二条家の奥秘といふべし

一 二条家為和傳書

写

一卷

此書は哥仁正親大祖當家一流と題す亦系圖は御堂道長公より為世の流は嫡家為衡まて次男為藤の流は為邦迄五男為冬の流は為右まて以上二条家の三流今泉派為相之流は為益為將之十代に終る二条家の大略を載す次は懐紙の書様は子會の事講師の事懐帛之書様披瀝之事等を粗記載あり矣書子曰

如何様年風尾下以拜顔於、而不紊之義可申披
講博士ハ去年注進矣、而只今注不進ハ

為和 光押

一 永正日記

厚

一冊

飛鳥中榮雅卿撰

此書一名懷宇案と題するあり記する処は懷宇
之の一首懷宇の事二首懷宇の事三首懷宇の事
五首懷宇の事法樂の事讀師の事講師の事発声
之の事懷宇閑の事短冊閑の事短冊况の事蓋の事りて題
之の事當生録草認の事短冊認様の事短冊の事

會席之秋、口傳等注之

右之間書者、去ル永正十七年之夏、於防州山口所
本所様、御下向、御滞留中、受御蒙之説、了
又大永七池永清、南僧、如世、之砌、於旅宿、隨分懇望
令写書了、殊之外、御秘藏、ハ、一、依、を、借用、申、ハ、の、努
秘、ハ、糸、南、寛、文、三、癸、卯、年、晚、書、中、三、洛、陽、在、居
之、節、後、松、軒、仲、安、飛、鳥、井、殿、雅、庸、ハ、以、自、筆、書、之、留
置者也

寛延三庚午年冬写之

具 乎

右秘本、請上野権介、氏精、刻、臣、終、写、切、了

千時宝曆六年歲次丙子二月十三日時永花押

一 延愛為耕兩御新陳狀 寫 一冊

此編初め古今集以降加撰者不遂其帝天亡不
吉之論より古今作者の内源廣純は帝純に誤寧
の詳論虚詐の相論撰集に入は不拘官位に浅深
不依痛麻に高下例に多寂蓮有家卿早世に夏合
矣付墨の多新古今撰者に内雅隆朝臣に多相傳
文書に多為兼相傳に証本に一書之自承本不審
之に為教に不為撰者多花心院所自撰於遺集に
例可為禁忌に多以上勅撰に多に依り兩口洋論

を勅裁あり菟未子阿仁尼に書状を載る是為氏
勅撰を文給りよりにひの女也

右一巻為廿御奏状摘要抄に所謂同状者則為兼
卿申詞也為擧後見に蒙取記此旨而已

垂台藤屋 刊

此本者連歌師宗紙右筆宗梅手跡西三条道通院
矣書在に一軸借出令書寫了

一 去旨法尔和奇注書 寫 一冊

細川藤孝入道玄旨著

卷首玄旨法尔秘注證奇目錄と記す自一条至廿

古書刊例在會

古書部
傳記
存
會

三 条 人 丸 自 廿 四 条 至 廿 八 条 家 持 廿 九 册 兼 傳 册
一 二 公 忠 册 三 四 神 宮 女 御 自 卅 五 至 卅 九 清 正 自
卅 至 卅 二 奥 風 四 十 三 是 則 自 四 十 四 至 五 十 二 小
大 君 五 十 三 四 能 宣 自 五 十 五 至 八 十 兼 盛 自 八 十
一 至 九 十 七 費 之 自 九 十 八 至 百 二 伊 勢 自 百 三 至
百 十 六 赤 人 百 十 七 八 邦 基 自 百 十 九 至 百 卅 九 唐
之 自 百 四 十 至 百 五 十 三 源 順 自 百 五 十 四 至 百 五
十 九 元 備 自 百 六 十 至 百 七 十 元 真 百 七 十 一 件 文
百 七 十 二 三 忠 見 自 百 七 十 四 至 百 七 十 八 中 務 以
上 各 首 之 註 書 小 して 弄 学 必 讀 之 編 あり 癸 酉 年

号 月 日 を 欠 ず 只 法 印 玄 旨 在 判 之 記 す

一 実 陰 公 言 談 写 一 册

武者小路准大臣実陰公撰

此 書 は 超 岳 院 実 陰 公 和 奇 の 心 得 を 種 々 被 仰 置
し 之 似 雲 法 師 自 筆 を 以 て 半 を 記 す 書 中 後 水 尾
院 烏 丸 光 榮 公 野 朝 臣 中 院 通 茂 卿 等 の 御 物 語
を 被 書 面 齊 會 之 事 亦 と わ け て く わ し く 亦 一 其
御 物 語 と 同 子 年 月 を 分 明 子 記 され たり 和 奇 子
志 し あり 人 は 必 讀 す 一 又 似 雲 法 師 は 此 公 子
御 弟 子 亦 あり 故 子 書 記 する 処 あり

古書部
傳記
存
會

古書部 保存部

一 丹比素那傳 一冊

賀茂真淵翁 撰

此書は皇朝の學は歌を得たはかなはさるよしを詳しふ女奇の予百紫集の予五十音を心得へき予令律と學ふ一き予奇之躰の予鎌倉右厨り奇の予其外種々之心得を述ふ明和二年七月十六日記す
一 いははの夜 一冊

鴨祐為著

此書は明和七年十月十五日長明入道蓮胤法師

五百五十年の追慕をいとなしてそれが旧蹟醍醐日野之外山は方丈石を尋ね法界寺に到り其辺の名所をも探り和奇を録す
歌草の奥子よくそ山ふけとられし奇人の情かくてうそと感吟は 入道大納言為村卿
たつね入死山はと成き奥まで山深き心そし
るへとはある
御返し
ととの紫の道のしはへをおもはすはいかし
昔しの次もたつねむ

古書部 保存部

明和七年冬十月十七日

於長明大支靈前請書

鴨

祐為

花坪

一 大津之三津之考

一冊

此書は万葉集の一子同分七等其餘子載る大津
之三津の瀆辺者難波と江川と大津之三津也
り一名二所と知る一しとあるを其以未の撰集
家集を引し各所の考を詳かよせし編ぶり

一 國奇臆說

写

一冊

賀茂真淵翁著

一 八論餘言

写

一冊

一 哥公約書

写

一冊

田安右平門督宗武卿著

共二篇

賀茂真淵之後叙

一 國歌八言評

写

一冊

伴蒿溪著

一 八論餘言拾遺

写

一冊

清水瀆臣著

以上之五書は和奇八論の道を正しくす一論

書にして此道は志しある人必讀すべし

一 國奇八論介非

写

一冊

大菅公主讚美著

古書刊行會

古書保存會

此書ハ本居宣長大人の注書にして和歌之八論といふは

歌源論 玩歌論 擇詞論 避詞論 正遇論

官家論 古学論 準則論

右之八論之非を挙げて介けは処に編なり

一 楠山拾葉 八冊

石川清武著

万治三年洛下雲堂子樵鼎跋又半隱亭といふ矣

書を添ふ此編は万葉集の奇よふ升たは名所を

いろはわけにしはは処にし其名所の澄奇の便

みす

寛文十一年辛亥春三日山本景正梓行し

一 萬葉猶落系 五冊

正木干幹著

此書は奇よふ升かゝるんとすは初学の為子万葉

集の字のおもしらくめつらしき詞を類さわが

し題をもろけて五巻とせり

卷一 天象の部 卷二 地儀の部

卷三 神祇教人倫国御居所の部

卷四 服食器賦の部

古書保存會

卷五 鳥獸 巢虫 草木 部

以上奇字彙之考證はすへき多し載之

一 萬葉物名考 三冊

靖園殘叢撰

此編は万葉集中之物名を部門を分けし其名称を考へる処あり其部門と物名の扱は左に如くなり

天地部 三十三 山野河海部 二十二 道路の部

八 水泉部 八 土石金玉火部 十二 世之部 一 歳時の部

の部 五 神祇祭祀の部 八 仏墨の部 五 葬具の部 一

人倫 親戚 形体 之部 五十八 言語 之部 七 武具 之部

八 農具 之部 三 服玩 之部 一 履襪 之部 三 車輿舟艇

之部 十 漁釣 之部 四 畷獵 之部 一 衣帯 之部 十二 械

織 之部 三 麻布 之部 二 色 之部 一 酒 之部 四 壺 之部

二 稻穀 之部 三 芋 之部 二 器 之部 十四 器物

ノ部 六 容飾 之部 二 行旅 之部 七 籠輿比 之部 四 尾具

之部 二 虫豸 之部 四 羽族 之部 十八 毛群 之部 九 草

之部 廿一 木 之部 三十一 牛 之部 二 混雜 十一 以上

弘化三年丙午十一月三十日書了 六冊

古書採存會

富士谷成章撰

卷一 和奇の五則此篇の載り処は

五体 歌人名疾字作者の例也 六連

卷二 詠格 選辞 詞 題

卷三 時節 春部天象 地類 時令 人

卷四 同 夏部加彼飾 器用 雜

卷五 同 秋部陰陽用

卷六 同 冬部前同

以上 意 雜 旅 名 所 諸 癡 雜 式 等 不 載 寛 政 五 年 秋 上

木

一 古今選

本居宣長撰

村田並樹本居大平同校

此書は鏡の屋うら奇よみならふ人の為に其一

バ集し中より殊子すく此た成奇をえらひあつ

めし常子これよみかへしすかた詞の年今

子せよとわし編あり

一 古人贈答歌抄 三冊

清原雄風輯

菱原一虎子野幸雄同校

此抄は雄凡くし初学の入贈巻の返し奇よけ

らふ又きため子もとして万葉集より八代集まで

贈巻の奇をおきたりしを更にもまた廿一代の

集めの中よりえらひあつめ四季忘雑之類をわ

かちて校訂せし也

一 續冠辞考

五

三冊

版部あ五郎平高保著

此書自跋に云右は冠辞より下へのつ、け師の

筆蹟せし部字あつめたれとも委く断り書出す

子も本よはしかく中子もとおもふをえりて清

書すへき也或るはひとつみつかぬ書すへし又

安永四年冬十二月考元千時續撰冠辞百三十四

條也下の一卷に別記よして五十四條の考へを附

すすへての書なり冠辞考に習ひあはれは古学の火

ひも益ある編也撰者高保、縣后翁の門人にも

て其人とふり詳に洵筆話に見ゆ

一 近葉菅根集

十卷 五冊

清水瀆臣撰

文化十二年初轉巨勢日白守利和序菱原忠喫木

村定良の長奇を巻首に載す

此集下江辺長流僧湛水瑣岬阿闍梨より縣居門

をかきり置長子蔭春海士満久老奥彦を始め作

者四十八人の長奇を一の家集ある人々の家集

子もれたるまても残らすあつめし類聚す如斗

三石四首なり長奇よまむたよりよは是よ過た

休書ある一からす文化十二年中華刻城

一 千鳥のあと 一冊

中臣親満著

松倉左清序荻原彦磨大石千引之後叙

此篇色紙短冊懐紙に奇るくことこの法式をつは

らよし古人の志跡或は古書より考へ其外

奇学必用の事を認めたり其目錄は

兼題書体三条 詠草書体二条 懐紙書体二十七

条 短冊書体十七条 附尾十一条

文政二年神無月十九日

美濃国不破人中臣親満しるす

一 歌 一冊

平春海 著

此書はいししへより勅撰家集にいたはまし世

古書保存會

古書保存會

るよ奇の姿もこと業もうつり替りて今の世の
奇よいよしへよはいたくくたりたるときとき
をせし編なり

一言業の子種

七冊

鈴木重胤著

弘化二年の春植松修理権大夫雅恭の序

此編は初心奇よむ人の為よ奇門を立しよむ方
の便利みす四季志雑各々題をわがちて澄奇と
詞をあげわかりやすよふよせり

一 津にし美草

写

一冊

源 良顯輯

宝永庚寅年迹生之自序

此記旧事記代巻神武紀古語拾遺中臣坂等の妙
あることの業傳へりけしる共あるはみつから
考一あしたることとよとよまよ奇面首よつ分ぬ
たるよて作者は山崎無如の門生よや巻末よ
山崎無如翁は菱森の神心を受得し明らかる
此道をかへけあしたまふ末の世よ又たくし
末き事より無如靈社と祭り侍るよのかれ此
傳一の流れをうけて期ふ夕ふ無如の神の恵

古書録

古書録

みき作き侍る

魚加の杜子照す神の道花咲藤の森子つゝきて

此集和奇百首子つゝぬあり故に此部子ぬめた

一 神代六首和奇

写 一冊

一 下部兼最撲

一 初 勿 流 多 苑 伊 都 毛 炊 覇 餓 岐 苑 磨 語 味 爾 扱 覇 餓 根 免 俣 憲 贈 延 初 覇 餓 岐 廻

此奇一字妙二句妙三意妙四始終妙を解

二

阿 姪 奈 厲 初 七 登 多 茶 婆 多 廻 珣 奈 餓 勢 厲 多 磨 延 孫 素 磨 延 阿 奈 代 磨 改 歌 孫 多 爾 哺 施

三

和 施 羅 須 阿 泥 素 企 多 加 避 顧 祢 下 照 暉 阿 磨 佐 箇 爾 阿 泥 素 西 渡 以

四

智 嗣 妹 盧 豫 嗣 爾 豫 嗣 豫 利 樓 祢 以 嗣 箇 施 箇 輔 智 箇 播 利 和 施

五

饒 企 都 鄧 利 軒 茂 豆 勺 志 磨 爾 和 我 謂 稱 志 伊 董 播 怒 介 茂 蒼 播 磨 都 智 耐 理 蒼 皇 孫 憶 企 都 茂 境 階 爾 憶 蒼 庄 耐 母 佐 祢 耐 樓 茂 阿

古書保

古書保

茂懽和素羅珥蒼能境鄧馭鄧母

彦火出見尊

六 阿利那磨通比訶利播阿利登比鄧播伊珥耐

企珥家蒼贈比志多浦姑句阿介利 豊玉姫

以上六首の和奇を和解し見易からしむる者也

書中叢祖兼直云々と記載す

元祿十丁丑歳十二月中旬 萩野常流書写之

一 芥子草 一冊

藤井高尚著

享和三年霜月橋下蔭本居大平之両序

此書に載る処に標目す

一 哥之こと葉書の大をね 一 七の記し並歌の

こと葉書

一 芥子の人は送る歌の詞書 一 詞書ハ書やす

からぬる 一 昔の松と葉書何まを採しるした

はる 一 詞書ハ書やす 一 詞書ハ哥よ

もらしたはことを書度 一 女とさきみいひし

あやをふす詞 一 題をかく度 一 繪に書はか

たを題してよめたは哥之詞書 一 月日を書度

一 同してよそをかきふる度 一 字音の語

古語類聚
御成
存
會

よよし可しあはま
一馬のはなむけよよした

万が哥のそ象書
一哥をもとしるすま
一詞

書すましき歌のま
一

享和三年二月八日書添奥
付す撰集及ヒ古き

集より抄出しして正しき例を奉たり
一冊

一 濱つと
一冊

加藤景範著

此篇は天象地蔵神仙人変草木鳥獣虫魚衣服器

物之類凡哥をよむ所の物之こと葉を集めて

部門を分ち使用よしたは書なり

一 紫文製錦

八冊

橋本箱秀輯

文化四年春本居大平序

此編ハ源氏物語の中より文かゝむ変こたすけ

と亦百へくお母かゝる変共を集め出し平昔し此

言葉つかひをよくわきまへして文かゝむ心得と

す流処ふり類聚之部今は和哥之類題と同一文

化十年六月上梓

一 策文明消息

一冊

同 著

古語類聚
御成
存
會

古書刊行會

文化四年十月廿日自序

此書は源氏物語の消息文をぬきおして傍注を

加へ消息を書助とす其注を師云としるすは本

居翁之説あり

文化四年七月刻成

第拾九

和歌雜部

一月詣和歌集

四冊

頃茂重保校清水濱臣標註

橘千蔭之序平春酒の跋

此書は壽永元年の撰りし時の歌人の勝れたる

を撰べり平家いまだ盛ん成し程の度より平氏

一族の歌たく入たり千載集を讀人しむと入

たは忠度行盛兩朝臣之歌とも此集には名を

らわせり

一月詣和歌集補

一冊

古書刊行會

横山由清校注

安政五年七月井上文雄序由清の致す曰
右月詣和奇集補既一卷はい子し子友人山川正
份の蔵本をかりし刊本は校合す成つては子か
ら別巻に写し置つ成を書屋に見しかの標注は
附刻せまはしといふまは元本の本裁は亦
らし撰集家集等子校合しし元子注款めくもの
書しるしまた清房光房の蔵本を得て別校す成
は季鷹縣主の本とあるは全くおなじさまなか
ら永隆の校本といえは少し異ふ成はあれは

それにかたへはし成しそへてあたへつすべく
全く増補す成の百三十一首句を補ひる同を
注す成もの十五首作者を補ふもの五首也又校
ふは十月の部の補奇珠子多きは十一月部之闕
落まで混入した成ものな成し
安政五と涉二月もつ

一 遠島御百首 一冊

後鳥羽天皇御集

此御西首は家隆御定家卿之許へ小人の言として
遠海より巻さ小巻之如返報の詞集歌の裏書等

古書刊行會

定家入道明辭が筆ふり所製の才子懐奮と題す

て

秋の辺を運びむかば雲の上子ふれし月

も物忘れす即

此所首より警められたは詞書見一たり

一 壬辰百首 写 一冊

順徳天皇御製

壬辰は貞永元年也此所百首ハ下酉之秋是明辭

之許ハ又進遠島平墨契法皇後鳥羽院年號定家

澤門也卷首

春

風渡流春の氷のひまを西ら井あらわ水ある

鳩の下迄

寛元六年極月十日於燈一紙馳筆年々

和音の游は質稽りし芦田藩もまか子鳴喜は

南人もなし

藝阿刺伎 花押

此遠島二首首之両本者依為秋物九卷版即存生

之間者雖無被出殿中於所遊去之後南都大衆

院之前大僧正西房經覽被台下被写至刻仁同以

其却本令書写者也

文安六年七月九日

胤仙

花押

一 宰相中將若達春秋奇合

写

一册

大納言志家卿撰

此歌合は應和三年七月二日春秋くらへの百首

子しし卷首は

咲花も人の心ものとかなる喜としり世は春

をまたまし

此志家卿は俊成卿の祖父大納言俊忠卿の父也

り和奇及び子蹟も珠玉勝水たは卿なり

一 篠忽百首

写

一册

此集ハ左右百番つゝ二百首あり尤は法性寺開

白忠通公右は大僧正慈田の詠なり

一 光明峯寺歌合

写

一册

貞永元年七月於光明峯寺撰政家之歌合なり

其次分は

題 寄花恋

鏡

弓

玉

松

帯

縁

蓮

船 綱

奇 左方

権

大納言

基家

春宮権

大夫良実

右平門督良家

前宮内

卿家隆

兵部

卿成実 隆季朝臣 家長朝臣 非氏朝

臣 親季朝臣 知宗 中宮少将

同右方 氏部卿典侍 權中納言定家 信實朝

臣 正三位知家 行能朝臣 源家清

志俊 隆祐 中宮但馬 下野 兼

康 權中納言定家

判者 權中納言定家

百十番二百廿首あり此集奥に百首題を附記す

干時寛文五歳首夏下旬書写之一夜合了

右近中権中將 荻原 花押

一 撫子奇合 写 一卷

左中務君右平兼盛詠合三番云首なり

天曆十年五月廿九日左中門督みやすむところ

の御方のみたちみたりしとあわせあり奥に

これはあわせぬうた

としをへしうめのさる枝にたしこの花さき

ぬとしてめつるふるべし

一 神宮歌合 写 一卷

平兼盛壬生志見中務之三人の詠なり

天曆十年二月三十日題は 霞 春風 梅花

春雨 鶯 若菜 桜花 柳 欵冬 菱花 不

會志 會志

以上十二番

一 和漢葉作集 我見

写

三冊

撰者しらす

此集詞詠集之粹にして作者の宦位を以て順序を及し其題子依て却てを及す此書中山中納言宣親卿の白筆より同卿は長祿二年誕生長享二年九月十七日權中納言に任し永正三年九月出家今を去流三百八十年斗りたり此比迄は

傳りありし書にして其順序は左に

卷六 中納言家持より左車門督基貞に至り四

十二人

卷七 参議重より高定子到り廿三人

卷八 此参議式部大輔文時より散位諸範に至

り廿七人六位遣唐学生安信仲九より十

七人も各詩哥共七八首宛撰出し定家卿

如きは唯和哥而已

一 鷹百首和哥抄 写

一冊

後西園寺相国実兼公作

古
書
備
在
會

此抄奇よより妙おきもいと多し又い子し一鷹
の流りは「多敷の日」なみの子へしたんとや
野、禁野狩声もする
抄よ云内裡へ毎日鷹の鳥を捕ふ六日を除く
也交野禁野曰前也日次の贅をたしまつ依し
禁野といえり宇多野なと禁野たるべしとある
を以しも其盛人ありしをを知るべし
此一冊者十二代祖後西園寺相國実兼公作依所
処望書写卒不可説子は
此御契書は西園寺大納言公益卿と自筆自判疑

無之者也

寛永五年八月十九日

花山院中納言

永原土佐守殿

一、道堅法師自歌合

写

一冊

細川右馬頭持賢入道々堅作

此奇合は独吟之五十首左右廿五番あり褒貶の
判詞兼契書等七作名あり其末子曰
明應六の年し初すのはしめの八日と水をしら
す
正六位上九河内俊恒
右一冊道堅法師自奇合也件奉從親王御方申出

古
書
備
在
會

写了

彼本 後柏原院勅筆なり未遂一校者也

干時永祿十二曆夏六月上八日

正五位下行左近少將源通勝

以上彙書之本書写校合了 出好使玄旨判

一 和哥一字抄 写 二册

抄者知らず

此抄上卷題百一下卷題九十五各々多抄其證哥

を載す其首め東子は春末迄東

东路は久く是の関もあかものをいかにが事

の紙て来つらん

師順

作例と此子准す又和哥合し上卷五百八十一首

下卷五百五十七首通斗午百三十八首なり彙書

子曰

此一帖以飛鳥并大納言微所本陶比林志竟曰後

被接了然卒度被初見餘処望之條為筆者七人写

之託外見悖多者也

干時大永元年八月廿三日 被今日如此年号 摘長耗

一 新古類勺和哥集 写 百二十册

撰者知らず

古書備考

此集は世々之撰集はいふ迄も亦く家々の集及
以新撰和奇集のうちより上の句をもつて
はわけ又あし古今類々の増補大成ともいふ
き集なり
一名僧愈歌廿六歌仙 写 一冊

撰者知らず
此書は一人一首を撰みあし歌仙とあす其人名
は
慈円 遍昭 素性 寂超 叔覺 増基 心覺
隆忍 俊忍 良暹 賢知 源縁 道令 勝

親 寛祐 源慶 実源 能因 寂然 隆縁

隆源 顕昭 西住 寂蓮 西行 祐盛 許添

永成 戒心 寛念 俊信 永源 淨藏 有

因 宣疎 以上一人不足

一 吉野百首 一冊

文禄三年二月廿九日 關白秀吉公和州吉野御遊

覧和奇之御會あり兼題五首花の類 不散花風

涌上花 神前花 花の祝 讀人は如左

秀吉公 關白秀次公 右大臣晴季公 権大

納言親綱 権大納言輝資 同家康 権中納

古書備考

言秀保 同秀経 参議左近衛中將秀家 同

利家 右中門督永孝 左近中権中將雅枝

侍従正宗 准三后道澄 常真 法中旨

同全宗 法眼紹巴 同由己 法柳昌比 以

上

よしの山梢の花のいろ〜みおとろかれぬ

る音の明仄 秀吉

ちらさしとふ極の花の枝よしの、星は風

も吹しな 利家

此書准三后道澄より至巻末織田常真公自筆首

巻より准三后迄之筆者知れず洛東鷲峯山高基

寺藏板

一 虫奇合 一冊

木下長嘯子作

巻首は自序あり丸右十五番三十首之哥和判者

ハ藪本蓋ト作名す拜行の月日は丸右

元禄のまじきのへいぬまや歌る歌ふり月半の

八日

一 中務内侍日記 写 一冊

内務内侍は冬嗣公之八世伯耆守範永九代従三

古書刊行會

位永經卿之女なり
弘安五年八月月見の御宴あり正應五年二月
到る迄行奉行啓節會所會等の時子詠る如奇及
ひ其規式おしくわしく載る
このたひそ三輪よいつたふもおもしろ
うとく松の木よわさけつたふもおもしろ
し
年月はり年茂しらて通しかとけふたつぬける
三輪の山本
一 面首異見 五冊

香川長門介景樹著

文政九年之秋平直好筑前守中臣連胤國假名之
二序次同三年春二月平景晃漢字之叙菅名前之
後叙

此書権中納言藤原定家卿之撰に給ひし小倉百
首ノ注抄よしし巻端に總論を載せ次子歌解を
詳よする平先抄多しと云ふ此記を以先卷した
成べし文政六年上梓

一 大神宮御法樂十首 一冊

元祿十四年九月廿一日西會具御六才九

新書刊行會

古書保存會

院	御製	百首	左大臣兼	源大納言	通誠	同	二十首
中	將	綱平	同	源大納言	淳房	卅五首	
左	大將	綱平	同	源大納言	淳房	卅五首	
右	中將	輝光	三十首	藏人	頭隆長	十首	
前	大納言	重保	卅五首	宰相	中將	基長	卅首
左	中將	公緒	二十首	右中將	公澄	二十首	
同	定基	卅首	中納言	通躬			
前	源大納言	同	清水	谷大納言		六十首	
今	城前	中納言	三十首	藤浪	二位	二十首	

外	山	三位	同	宮內	卿		卅五首
左	承門	督	四十首	白川	三位		三十首
花園	三位		二十首	給部	卿		四十首
東	久世	三位	十五首	風子	三位		二十首
菅	三位		同	通清	朝臣		十五首
氏	孝朝	臣	二十首	兼廉			十首
為	久		十五首	相尚			二十首
德	光		十首	雅季			十五首
講	師	春	宰相	中將	基	隆長	朝臣
六	部	卿	秋	左承門	督	冬	兼廉

古書保存會

忘 舊光朝臣

題者 春夏委 九北門督

秋冬雜

治部卿

奉り 今城前中執言 左中門督

治部卿

一 靈元院十七回聖忌勸進和歌

一冊

寛延元年八月六日奥行四十八首

題者 右兵衛督 奉り 幸雅朝臣

初春恋

院所製

春之に七ふやまゆらいと詠し七じのふ處

のへたしゆく世残

一本空院宮五十回所忌進講和歌

一冊

寛延元年七月廿五日奥行三十二首

題杖懐舊

院所製

如字記吾し五十の秋さしゆふ秋之あかむる

月七空かくれゆ成

一 雨太神宮奉叙詠千首和歌

一冊

園々詠

巻頭 五春朝

明渡百今朝より之先月花も心よりゆ成まの

長閑さ

後序に曰言の系ハ同ノ安子していひせ成処

皆らたぬらすや代々之人々一羽の程もしむ子
 首もみたまふあまたあらんかし印つたふき筆
 子かちうちそめしておよはぬ敷さとりみればつ
 せれる年としも今夜り明方近き空もみち侍も
 我師ぬ泉庵主もむをらすても更しなすた
 まりければ伊勢の古御神風や吹来りつても御
 神のめくしさを仰つて奉納し侍らむかの敷らし
 享保七丑年初冬
 園女
 附録も三十首又あ太神宮へ奉納す其巻後の奇
 子

神明依正道

二冊

まもかき神の恩みすはあるととの祭
 の世代こみさかへむ

一 源氏百人一首

一冊

黒沢翁満著

此書は定家卿之小倉の色帝ならし源氏物語
 の中より百人を撰ひおのその名奇一首つ
 らを必しし児女子のわかりあきよふも註釈を
 かへられたり本書は大部の女のなればおつて
 書よりして源氏の大意をさとりへき為りせし

編あり

一 荷田在満家歌合

一冊

賀茂真淵判

此奇合は荷田在満家より得させしより到る真淵判也翁の奇合の判せられたるは此外には少しとそ判詞之跋言む奇絶あり附録には真淵翁春道大人のものとよし奇の會ありしおりの人の奇よ真淵翁之評せられたるもあつめて清水濱臣校正して附刻す其評詞卓絶又して後世の評言よくとあるととおほし

一 西人一首新抄

一冊

石原正明注

廿二百人一首の注よまたあはれと七別よひとつの処見ありし先一首とよ句のあひたよ注を加え其末よ一首の大意を添語よし紙たしたる抄なり

一 養老和奇集

一冊

五十嵐篤好撰

此集は賀茂真淵隔々各抄校二人の奇あり四季志難等部類をわかち八百首余を奉たり長奇也

入たり今世は近世の奇を類題したは集何く水
と種々数多くある其初学の徒ふか
ぬ道へさそわぬ入りぬへきか多かれは篤好門
人の為子此二人のうしは古人も立並ふへき
奇とも多かれはよき本なるへきをえらひ題詠
は奇の本意反らばは只部類をのしわかつた
るものより尋常の奇集よりふとなるものなり奇
字はむとする人はみるへき書あり天保二年上

粹

一 幕朝年中行事奇合

字

三冊

（第壹巻）
九九四

西三院法印北村季文作

天保十三年八月朔日自序文政六年五月林衡漢
字之跋判者兼名少將定信朝臣註者堀田堤津守
正敦朝臣なり左石題五十番之奇合凡例に云
此石首奇合は貞治の年中行事奇合に習ひ五十
番とす徳川氏執政中二月より十二月にたり
て月次より其式の次序を述べしむを定む一年兩
度子及ふものは其はしめきとれり又定例の外
餘時之行事取りしは餘時の部におさむる端は

左免美

古書保存會

たり子あへは千世のためしと成子けり雪の
林子深たる危茂

右屠蘇白散

延とつふ千代のくすりのたみきを
幸し後子々口かな

天保十三年八月朔日降書 同日四日坂本并再記

あり

一 詩哥合

一冊

此編は唐朱之詩三十首林羅山と水を撰り
三十首は中院道村公し撰りし配射せらぬ處

第九五

あり

一 兼應二年褒貶和歌

写

一冊

後水尾天皇御子依し所添削之人は和奇替古之
認并子各褒貶之言系有之此時天皇は心統あり

水石翫久

六月朔日

竹風秋涼

閏六月朔日

野萩廣

七月朔日

月不撰處

八月朔日

林葉湘江

九月朔日

蒸氣浮水

十月朔日

帝園南霞

十一月朔日

雪歌遠栢

十二月朔日

以上八ヶ度之月並しして其御人教は

古書保存會

式部卿良仁親王 道晃法親王 飛鳥井大納言
 雅章卿 正親町中納言實豐卿 鳥丸左大臣宰
 相資慶卿 德大寺中將實維 坊城宰相俊
 圓宰相基禰卿 正親町三條中將實昭 庭田
 白川中將雅喬 東園中將基堅 阿野少將季信 西
 中將雅純 却備前守實信
 以上十七人之内德大寺中將依若年褒貶詞御理
 有之

一 河藻奇集

蓬蘆村上志須撰

二冊

文久二年三月撰者之假名序

此集ハ詠史の和奇の升子し人物題亦り亦者七

抽ひし近き人の升子し三五四十二人世毒く究

後子姓名録を載せたり文久二年夏上梓

一 類題和歌神闕

加斐古風撰

六冊

此書ハ世々行傳、類題和奇集の題のみあけて
 奇の欠た家二十九首ををくらし代々の

勅撰家々の集歌合ふとより採集の且題の誤字
を考へ訂さば是れは奇のむ人のかならず札也
まおくへきの書あり

一 於野集類題

十二冊

清原雄風撰

文化三年六月一日加交千蔭亭同十一月八日平
春西政

此集は撰者雄風古體の類題ふきを遺憾と思ひ

子蔭春海等は諱りて至集二十一代集を初め

古今六帖卅六家集後成定字隆西川慈田為字寂

蓮其奈家々の集中よりしりむたは編也

一 草根集類題

二冊

徹書記正徹家集

正徹字清若冷東々福寺松月庵子住廿後山科子

移住す和奇ハ今川了俊子字ハ殊子高年なり此

書は寒本之翁源躬弦徹書記に集なる草根集の

中よりいとめつらカホ依奇ともをえりいたさ

水しととま古黒本をて校訂せられ四季忘純

の類をわがたはたはあり

一 蘭桂和奇集類題

二冊

太虚庵主人撰

此集ハ道遠院内厨寧隆公称名院公條公三光院
実枝公之註玉集之處々誤小百を正すむ為子也
のせし由より実隆公條公の所集女の正しき本
を得て此書を校訂すよよし山本周禎が校子見
一たり又此集の癸丑公條公無題百首を載せた
り文化十三年子正月梓行之

一 雙玉類題

二冊

榊斗正明撰

此集は木下長嘯子松永貞徳翁の詠奇としらひ

（第壹巻）
年九八

類題となしたる編子し二家は元和寛永年間の

高千世の人知れり處なり

一 類題俳諧奇集

写

二冊

四方奇垣撰

此書は世々の勅撰家々の集或は物語ふひまた
哥合之類亦とよりすへて俳諧奇の躰はわたる
ものさ残がすむらさす書集て今の世の狂歌を
心るは古の俳諧躰に依とをしらしむ上ほ
奈良の朝より下は近代に致るまでも流はな
し且所々も傍註を加えたり

古書目録

一 類題草野集

十二冊

木村定良 撰

文政元年神龜月清水濱直同二年二月椿園主人
之函序此集は賢中長流真剛宜長より近世千蔭
春函等の奇を撰升出類題とす

春上

八百四十九首

春下

八百九十首

夏

千石八十二首

秋上

九百十四首

秋下

千八十六首

冬

千石二十三首

意上

七百五十一首

意中

五百四十九首

意下

七百二十六首

雜上

七百三首

雜中

千九首

意下

千石八十首

以上題數四千十四歌歌一萬千四十三首文政五
年上水

一 吐屑庵和奇集類題

三冊

此編之却立四季志雜卷尾は釜川石香芳野紀り
を附す

巻頭 歳中五首

おしまる年の日数の考は巻ふろつ水はか
わらふ砂ともあり

一 類題鶴玉集

二冊

夏目麿磨撰

天保十一年正月廿九日荻原千広假名政

此集は文化文政以来近世の和奇を撰ひ出し歎

歎とす奇拙凡三十二首あり又改五年八月

上本す

